中年期にある人の自己老後像と関連要因の質的研究
―積極型と消極型の対比から―
A Qualitative Study of How the Middle-aged View Their Own Old Age and Relevant Factors: A Comparison of Positive and Negative Types

松永　博子
（桜美林大学大学院老年学研究科）
直井　道子
（桜美林大学大学院老年学研究科）

要旨

本研究の目的は，中年期にある人の自己老後像を分析した後に見出したパターンから，積極型と消極型に焦点をあて，それぞれの型の自己老後像を明らかにし，またその関連要因を明らかにする事である．東京都多摩地区居住の44歳から56歳の中年期にある人を対象とし，半構造化インタビューを行った．質的分析には，KJ法を用いた． 21名の対象者の図解から，典型的なパターンが見受けられた積極型４名，消極型４名の計８名を抽出し，パターン別に分析を行った．その結果，積極型の自己老後像は，今後の人生への信念と意欲で統合されていた．消極型の自己老後像は，これからへの思いを抱きつつも，今より消極的となっていく自己老後像と揺れ動く自己老後像で構成されていた．両型とも自己老後像は，自己認知と高齢者観と関連していた．特に，肯定的な自己認知は積極的な自己老後像と，否定的な自己認知は消極的な自己老後像と繋がる事が明らかとなった．

キーワード：中年期，自己老後像，高齢者観，自己認知

1. 緒言

近年，平均余命の延びに伴い，高齢期はますます長期化し，人生85年を想定したビジョンの必要性[1]や40代からの人生計画などが提言されている[2]．それらは，より早い年齢でのSuccessful Aging（豊かな老い）への想定や計画の必要性を説くものである．本論文の第１の目的は，第１次分析した中年期にある人の自己老後像から見出されたパターンの中から，対極にあると想定される２つの型を取り上げ，その２つの型の人が，自身の老後をどのように捉えているか（以下，自己老後像と記す）を明らかにする事である．中には，まだ自分の老後を考えたこともない，という人もあるかもしれないが，それも含めて自己老後像であるとした．第１次分析によって見出されたパターンは，ⓐ老後への目標を持ち意欲もある者，ⓑ「ああいう風に

はなりたくない」という否定的な高齢者観から自分はそうならないようにしようという意欲を持ち高齢期に向かおうとしている者，ⓒ具体的な自己老後像はないが高齢期に向けて何かしようという意欲のある者，ⓓ目標とする自己老後像はあっても日々に追われ意欲が低下している者，ⓔ老後に対してあまり関心が無く，意欲も感じない者というⓐからⓔである．第1次分析において，21名全体から自己老後像の統合を試みたが，上記のパターンからもわかるように複雑な図解が形成された．そこで，いくつかのパターンから自己老後像を明らかにしていき，その後全体を統合する方がより明快な知見が得られると考えた．本論文では，上記のパターンの中でも，ⓐ老後への目標を持ち意欲もある者（以下，積極型と記す）と，ⓔ老後に対してあまり関心が無く，意欲も感じない者（以下，消極型と記す）を取り上げた．その2パターンには，第1次分析の図解から極端な差があり，その2パターンに注目する事から自己の老後に意欲的な者とそうでないものの具体的な違いを叙述しようと試みた．

第2の目的は，自己の老後に対し，積極的な人（積極型）と消極的な人（消極型）の差異はどのような要因と関連しているのかを検討するために，自己老後像と関連要因との関係性を明らかにする事である．

自己老後像を明らかにする事を目的とした背景には，少子高齢化の進行に伴い，中年期にある人の老後はますます厳しい状況になると想定されるからである．そのような高齢期に対応するには，より早い段階で自身の老後を想定し，それに向かって努力するといった，主体的な姿勢が求められる．鈴木[3]は，幸福な老後を実現するためには，目的を持って生きて行く態度が必要であり，中高年が日常の中で，生きる目的・目標を明確に持つことが社会活動を活発にし，満足度を高めるとした．よって，自己老後像を明らかにすることは，高齢期への心構えづくりに寄与し，さらには，Successful Agingに貢献するものである．

中年期を対象とした自己老後像の先行研究には，以下の3つがあげられる．老後の生活像を分類した古谷野ら[4]は，家族主義－個人の独立，隠居－参加の2つの次元から語られる事を明らかにした．また，児玉ら[5]は，望ましい高齢期とは，安定－変化，同調―自己主張という2つの筋道からなる事を示した．中原・藤田[6]は，高齢期に望む生き方を，変化・挑戦的な生き方とし，現在の生き方との関連では，高齢期に望む生き方は，現在の生き方の延長線上であるとした．しかし，これらはいずれも予め特定の視点から選択肢を設けた質問による調査であり，対象者自らが自己老後像を自由に語ったものを用い，分析した研究ではない．また，自己老後像が曖昧な者でも，自己老後像が明確な者と同じような回答が可能であるという問題も生じる．よって，本研究では，自由に自己老後像を語ってもらい，曖昧なものも含めて質的に分析する事によって，自己老後像を明らかにする．

自己老後像に関連する先行研究からは，大別して次の2つの関連要因が浮かび上がった．第1として，一般的な高齢者に関するイメージ（以下，高齢者観と記す）がある．小田は，高齢者を対象とした高齢者観の研究の結論として，高齢者の持つ高齢者観は自己像であることを明らかにしている[7]．他に，高齢者観の自己への影響については，2つの矛盾した説がある．Heckhousen & Kruger[8]は，一般的な高齢者観よりも自己の将来に対しては，肯定的な予測を

するとした．一方，Butler[9]は，エイジズムについて，高齢者は，否定的規定を受け入れ，その事がさらなる否定的なステレオタイプを強化してしまうとしている．

第2の関連要因としては，自己の現状に対する認知（以下，自己認知と記す）があげられる．先述の小田[10]は高齢者の持つ高齢者観は，性と主観的老化度と自己効力感が関連しているとした．小田の示す主観的老化度は，自己認知に関わるものである．また，中原・藤田[11]は，現在の生き方と高齢期に望む生き方の質的な継続性を明らかにした．これらから，現在の生き方としての自己認知と，高齢期に望む生き方としての自己老後像は何らかの関連が示唆される．

以上の2つの関連要因は，高齢者を対象とした先行研究を主として想定したものであるが，本研究は中年期を対象としている．よって，中年期から自己老後像に向かって努力をするのかしないのか（以下，これを向老意欲と呼ぶことにする）も重要であると考えた．

これら想定される3つの要因と自己老後像との関係を見出す事から，自己の老後に対し，積極的か消極的かといった差異と関連性があるのかを追求していく．

次に，我々が中年期の人々を対象とした理由は，第1に，中年期から将来の老後像を見据えて心構えをする事は，Successful Agingに貢献するものであると考えたからである．第2に，それは同時に，現在の自分自身の状況を自覚する事によって，中年期特有の危機を脱するきっかけになる可能性があるとも考えたからである．中年期に特有の危機とは，体力の低下や身体の変調を自覚するなど，人生のターニングポイントを超えた実感からくる緊張や不安をさす[12]．そのような中年期危機への対応として，Levinson（1978/1992）[13]は，若さと老いを直視する事から新たな道を探し，危機が好転する可能性を見出している．Lachman[14]は，中年期における高齢期への計画が，現在の緊張や不安，精神的な問題を調整し，高齢期への移行を円滑にすると指摘している．

しかしながら，何歳あたりを中年期と呼ぶかについての明確な規定はなく，先行研究でも40歳から64歳までの間の対象者を中年期と称している．広辞苑でも，「青年と老年の中間の年頃．40歳前後」としていて[15]曖昧なままである．本研究では，老後について想定できるほどには歳をとり，しかし，老後への準備にはまだ余裕があると感じられるだろうという意味から，44歳から56歳までを対象とした．

本研究の意義は，これまでの知見が不十分である中年期にある人の自己老後像を明らかにし，自己老後像と関連要因との関係を明らかにする事によって，中年期にある人の高齢期への心構えづくりに寄与し，Successful Agingに貢献する事である．そしてそれは，中年期危機を乗り越える手立てを明らかにし，役割移行を円滑に進めるために役立つ事でもある．

2．研究方法

1）調査の対象と本論文の分析対象

調査の対象は，機縁法によって協力の得られた，44歳から56歳の中年期にある男女である（研究担当者である松永博子の機縁による）．いずれも日野市及び八王子市に在住しており，40

代男性7名と50代男性3名の計10名，40代女性7名と50代女性4名の11名，総計21名を調査の対象とした．21名の第1次分析の後，その自己老後像にはⓐからⓔの5つのパターンが見出された．その内訳は，病後で精神的に不安定な1人を除き，ⓐ老後への目標を持ち意欲もある者4名，ⓑ「ああいう風にはなりたくない」という否定的な高齢者観から自分はそうならないようにしようという意欲を持ち高齢期に向かおうとしている者5名，ⓒ具体的な自己老後像はないが高齢期に向けて何かしようという意欲のある者3名，ⓓ目標とする自己老後像はあっても日々に追われ意欲が低下している者4名，ⓔ老後に対してあまり関心が無く，意欲も感じない者4名であった．そこで，その差異が自己老後像にどのように反映されているのか，また，関連要因との関係性は異なるのかを検討するため，この中でも対極にあると想定されるⓐ積極型4名と，ⓔ消極型4名の計8名を本論文の対象とした．

2）研究調査期間

調査期間は，2012年10月から2013年1月であった．

3）データ収集方法

調査対象者に半構造化面接によるインタビュー調査を行い，その内容をICレコーダーに録音した（1時間から2時間程度）．

4）調査内容

インタビューガイドは以下の通りである．

① 自身はどういう高齢者になると思うか（自己老後像）

＊質問が漠然としており，年金を含む金銭的な問題に話が偏らないようにするため，以下の質問を手掛りとしてあげ[16]，インタビューを行った．

- 高齢者に新しい事を学ぶように求めても，無理な事だ
- 歳をとると，やる気や創造性が無くなる
- 歳をとると社会の変化に対応出来なくなる
- 歳をとると，何かにつけて消極的になる

② 自己老後像に向けて何かしている事とか考えていること（向老意欲）

③ 一般的な高齢者についてどう思うか（高齢者観）

④ 現在の自分をどう捉えているか（自己認知）

5）分析方法

いくつかの質的研究方法があるが，KJ法と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは類似した方法である．その目的として，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは，ヒューマンサービスの分野で理論生成に用いられ[17]，KJ法は，混沌とした問題を整理し，問題解決に向けて方法を生み出す手法とされている[18]．本研究では，混沌とした問題を整理するため，

KJ 法を用いる事とした．KJ 法を使用するにあたっては，KJ 法正規認定コンサルタント，エバーフィールドにおいて３日間の研修を行い，KJ 法の正規分析方法の習得後，１名分のスーパーバイズを受け，研修終了後はその方式に則って分析を行った（手順については，下記参照）．21 名分の第１次分析を行い KJ 法に十分習熟した上で，本論文の対象である８名分の分析を再度行った．分析の客観性を保つために，月２回以上の個別指導を受けた．第１次分析の結果については，２つの研究会での討論・指導を経て，その妥当性を高めるよう努めた．

本論文での分析にあたり，対象者が自己老後像と向老意欲をまとめて答える場面が多く，本稿では敢えて２つの概念を分けずに，自己老後像に向老意欲を含む形で分析をする事とした．

KJ 法分析手順（概略）[19]

① 逐語録から元ラベルを作成する．

② 元ラベルから，情報の意味内容の類似性に従って表札を作成し，グループ編成を行う．図解の中での島（最上位の表札でまとめられたグループ）同士の関係については，KJ 法関係記号を使用する（図１）．

③ 出来あがったグループ編成を元に図解化を行い，統合のプロセスの記述と叙述化を行う．
＊KJ 法では，複数の人を対象とした分析には，１人１人の分析をした後，その図解にある最上位の表札と表札に統合されなかった元ラベルを用いて再分析を行う．

図1．KJ 法 関係記号

6）倫理的配慮

協力の得られた対象者に対して，研究の趣旨を口頭及び文書によって説明し，承諾書への署名を得た．音声は，対象者の同意を得て，IC レコーダーに録音した．録音媒体と逐語録については，本論文関係者以外はアクセスできないよう厳重に保管・管理し，研究終了後は，データを破棄する事とした．研究の内容・方法が倫理やプライバシー保護において十分配慮される事については，桜美林大学研究倫理委員会の承認を得ている．

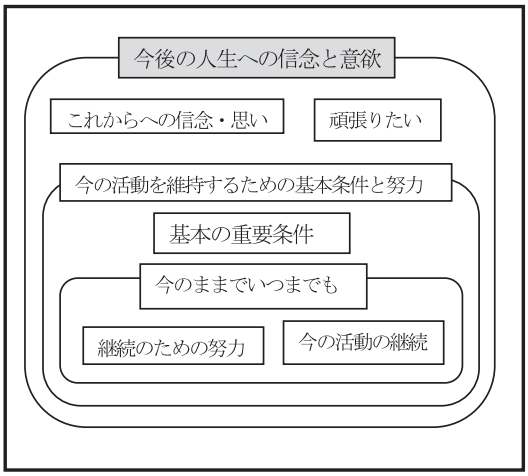

図２．積極型 図解化（略図）

3. 結果

1）自己老後像

（1）積極型統合プロセスと叙述化，図解化

積極型の自己老後像は，21枚の元ラベルから始まり【今後の人生への信念と意欲】という表札にまとまった．

【継続のための努力】【今の活動の継続】から，【今のままいつまでも】という上位の表札が見出され，そこに，【基本の重要条件】が加わり，【今の活動を維持するための基本条件と努力】という表札に統合された．さらに，【これからへの信念・思い】【頑張りたい】という表札が加わり，最上位の【今後の人生への信念と意欲】という1つの表札に至った．

積極型の人の自己老後像は，今後の人生への信念と意欲でまとまっており，望ましい高齢期のために取り組もうという思いが明白である（図2・表1参照）．

表1．積極型 元ラベル

＊最上位の表札は上の行に網掛け，その下の枠に次の表札を，以降の表札も同様に表記，表札の下に含まれる元ラベルを記入

<table>
<tr><td colspan="5">今後の人生への信念と意欲</td></tr>
<tr><td rowspan="3">これからへの信念・思い</td><td colspan="3">今の活動を維持するための基本条件と努力</td><td rowspan="3">頑張りたい</td></tr>
<tr><td rowspan="2">基本の重要条件</td><td colspan="2">今のままいつまでも</td></tr>
<tr><td>今の活動の継続</td><td>継続のための努力</td></tr>
<tr><td>●やる気が低下しない人と実際に関わっているから，やる気は低下しない
●良く生きる事は良く死ぬ事なので良く生きる方向にいきたい
●人に感謝して生きる事が一番大事
●母の様になりたいけど，母にはなれないので，母との時間を多く，たくさん過ごしたいと思います
●先はわからない，想像つかないけど努力したい</td><td>●健康が一番，後，お金がないと心配
●健康第一
●体力維持の為に週2 - 3回ビーチボール続けてる
●健康である事が大事，体も精神も健康である事
●癌は別だけど，食生活が大事，避けれる病気は避ける，体に良くない事はしない</td><td>●このまま，色々な関係を広げて，このままやっていきたい
●生涯活動に取り組んでいて，死ぬまで勉強は続けていきたい
●新聞を読んだり，勉強したい
●洋裁を通して，自治会の人達との輪を広めていきたい
●同じフロアの人がご主人亡くしたけど，この団地の人は，1人にさせない，引きこもらないよう協力しているから，ここなら安心</td><td>●仕事柄，勉強しなくなったらおしまいだと思っているので，勉強している
●今の職場では広がっていかないので，協会とか常に情報が入って来るようにしてる
●外に出て，色んな情報聞いてプラスに物事を捉えていきたい
●色んな所行ったり，会ったり，関わったりが大事
●歩いたり積極的に出かけたりしてる</td><td>●もうすでについて行けないものもある，全ては無理だから，出来る事は自分でついていけるようにしたい</td></tr>
</table>

(2) 消極型統合プロセスと叙述化，図解化

自己老後像は39の元ラベルから始まり，【これからへの思い】【揺れ動く老後像】，【今よりも消極的になっていく自己老後像】という３つの表札となった．【揺れ動く老後像】へのプロセスは，【病気は問題】と【譲れない希望】が【避けたい老後】に統合された．さらに，【断片的な夢の老後像】【放棄】【考えてない】【避けたい老後】がそれぞれに独立しつつも，【揺れ動く老後像】に統合されるに至った．その経緯には，【断片的な夢の老後像】の「老後，健康だったらバイク買ってかみさん乗っけて色々な所まわりたいな」という元ラベル，【避けたい老後】の「病気だと話が別になる」，【放棄】の「ごくつぶしになったら寝る様に死んでいきたい」といった元ラベルは同一の対象者のものである事があげられる．同様に，他の対象者もいくつかの表札にまたがった発言をしている事から，【揺れ動く老後像】という表札となった．

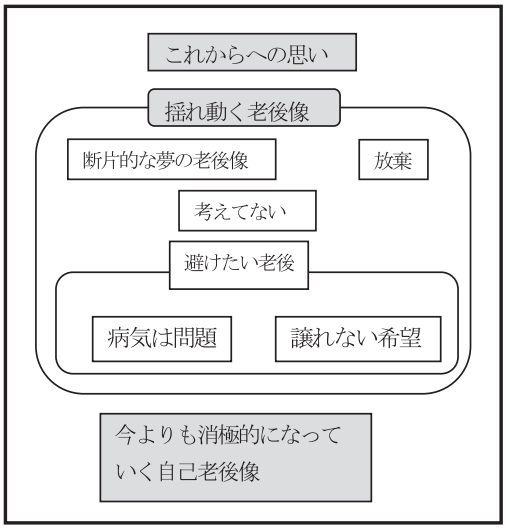

図３．　消極型 図解化（略図）

図解の中で，【今よりも消極的になっていく自己老後像】と【揺れ動く老後像】，【これからへの思い】はそれぞれに孤立しており，明確な関係は見出せなかった（図３・表２参照）．

消極型の自己老後像は，これからへの思いといった，目標とするような自己老後像のために何かしようと思いはあるが，今よりも消極的になっていく自己老後像と揺れ動く老後像を併せ持っている．

表2．消極型 元ラベル

＊最上位の表札は上の行に網掛け，その下以下の表札は◆に網掛け，

表札の下に含まれる元ラベルを記入

これからへの思い	揺れ動く老後像		今よりも消極的になっていく自己老後像
●色々なものに触れてみないといけないのに壁作ってる，若いうちは好奇心があったのに，そういうの，持たなきゃいけないんじゃないかな ●自分が歳とっても続けていけるものに出会えば，何歳になっても意欲を失わないんじゃないかな ●50歳になる前に何か始めて老後楽しめるのをみつけたいな ●消極的にならないよう，考え方を変えて自分に枠をはめないようにって思ってる ●出来る事，出来ない事あるけど，簡単に出来る事は取り組んでいきたい ●人との関係性において意欲が変わっていくんじゃないかな ●今，筋トレしてる，スポーツしたいって時に出来るように ●昔の仲間と疎遠になってるけど，また仲間と繋がれば，消極的じゃなくなる ●きっかけしかない，やらざるをえないような ●中身によって新しい事をやるかやらないかが決まってくる，興味のある事ならやるかも ●本を読みたいとか思うけど，今は，本筋になるものをあさってる感じ，やってるとは言えない	◆断片的な夢の老後像 ●老後，健康だったらバイク買ってかみさん乗っけて色々な所周りたいな ●かみさんと旅行行ったり ●野球見に行ってて，応援団の楽器とか吹けたらいいな ◆考えてない ●まだ40代だから考えてない ●この先考えてないけど，どうなるんだろうって思ってる ●気をつけてる事も計画してる事もない ●年金65だけど，70になるかもしれない，実際には何もしてない	◆避けたい老後 ◆病気は問題 ●病気をしない事だろうね ●病気だと話が別になる ◆病気は嫌だな，退職してもここには来ない，それだけは決まってる ◆譲れない希望 ●子供の世話にはなりたくない，子供とは一緒に住まない ●退職してもここにはこない ●ぼーっと家にいる事は無い ◆放棄 ●世の中についていけない，長生きしようと思わない，面倒くさいや ●どうなるか何とも言えない65歳以上って生きてないと思ってる ●人の世話になりたくないポックリいきたい ●ごくつぶしになったら寝る様に死んでいきたい	●自分も消極的になるだろうね ●やる気をもった高齢者ではないな ●世の中についていけるかな，もうわからない事，出来ない事がたくさんある ●今は想像つかない，行き当たりばったりできてる，休みで遊ぼうとかも面倒になってきてる ●アクティブにはならないだろうと思ってる ●敢えてチャレンジとかはないな ●パワーはどんどん下がっていくんだろうな，やむを得ない ●この後，10年15年20年ともっと大人しくなっていっちゃうんだろうな ●新しいことやろうとかないかな，何とも言えない，環境によるし，自分の為ならやらない ●周囲の変化に対応しきれない，出来る事はやろうと思うけど，適応力も劣る気がする ●自分のやりたい事を見つけるタイプじゃない，やんなきゃいけない事を，淡々とこなしてくのみ

2）関連要因

（1）自己認知－統合プロセスと叙述化，図解化

積極型にある人の自己認知は，17の元ラベルから，【充実した日々】【ちょっと頑張ってやる気出してる】，という2つの表札でまとまった．そのプロセスは，【そのままでいける】【今は大丈夫】という表札から【今の自分への肯定感】という上位の表札になり，そこに【すでに色々活動してる】という表札が加わり【充実した日々】という最上位の表札となった．島同士の関係は，【ちょっと頑張ってやる気出してる】は【充実した日々】に向かっていくという関係性が見いだされた（図4参照）．

積極型の人の自己認知は，ちょっと頑張ってやる気を出しつつも，直面する問題に対応しつつ，自身への肯定感を見出している．それに加え，すでに高齢期に向けた活動を始めており，充実した日々を送っている．

消極型の人の自己認知は，20の元ラベルから，【世の中においていかれている実感】【今とこれからを放棄している】【停滞期】【行き違う望みと意欲】という4つの表札で示された．そのプロセスは，【やらなきゃ】【低迷中】【調整が必要】という表札から【停滞期】という上位の表札が見出され，【望みはある】【やる気はある】という表札から【行き違う望みと意欲】という上位の表札へ統合された．島同士の関係性としては，【世の中においていかれている実感】から【停滞期】に向かおうとするものと，【世の中においていかれている実感】から【今とこれからを放棄している】という方向へ向かうという2つの流れが存在していた．【停滞期】から【行き違う望みと意欲】へは，明確な関係性はなかった（図5参照）．

消極型の人の自己認知は，体の変化などを通して，すでに世の中に置いていかれている実感があり，どうにかしたいと考えている人と，これからを放棄していく人との2つのパターンが

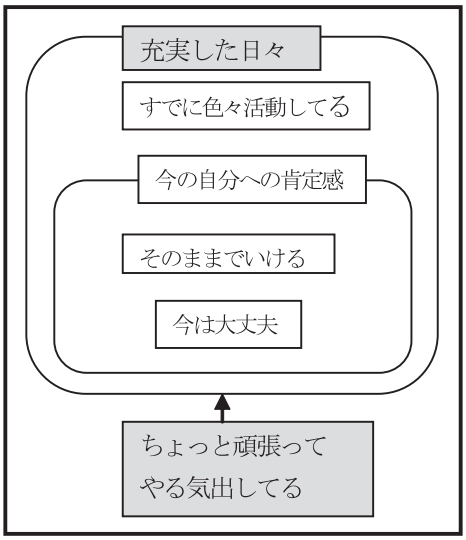

図4．自己認知－積極型（略図）

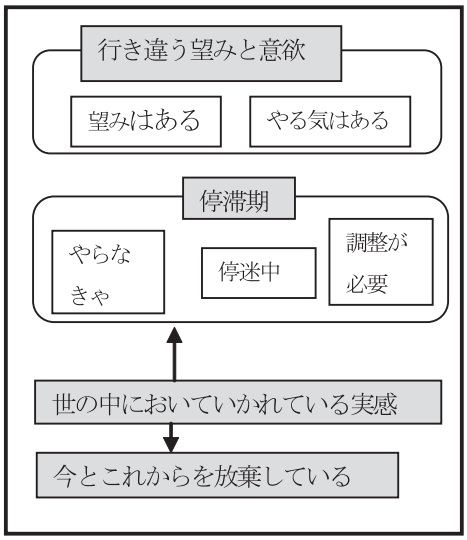

図5．自己認知－消極型（略図）

見出された．どうにかしたいという中には，やらなきゃいけないと考える人と，充電中や一休みという停滞中の状況や，自身の価値観に固執しないで，周囲と調整していかないといけないと感じている人などがいる．望みもやる気もあるけれど，思いのみに留まり，どうにかしたいと思いつつも，まだ何も行動出来ていない．

(2) 高齢者観－統合のプロセスと叙述化，図解化

積極型の高齢者観は，23枚の元ラベルから，【ステレオタイプではない高齢者観】【望ましい高齢者への信念】【病気や体の不自由からマイナスフレームへ】という3つの表札で表された．【ステレオタイプではない高齢者観】は，【ネガティブな面もある】【身近にいる手本】が【高齢者の望ましい・望ましくない姿】という表札に統合され，そこに【手本から見えるヒント】という表札が加わり【ステレオタイプではない高齢者観】という最上位の表札に統合された．【ステレオタイプではない高齢者観】と【望ましい高齢者への信念】は相互に影響しあう関係にあった（図6参照）．

積極型の人の高齢者観は，病気や体の不自由に伴うマイナスイメージも存在しているが，ステレオタイプではない高齢者観や高齢者はこうあるべきといった思い，こうあって欲しいといった思いとなっている．

消極型の人の高齢者観は19の元ラベルから構成され，【高齢者への望みと信条】，【高齢者も人それぞれ】，【否定的ステレオタイプ】の3つの表札で示された．【否定的ステレオタイプ】は，【病気や外圧による強いられたステレオタイプ】と【否定的ステレオタイプ】から構成された．【高齢者への望みと信条】と【高齢者も人それぞれ】は互いに影響し合う事が明らかになった

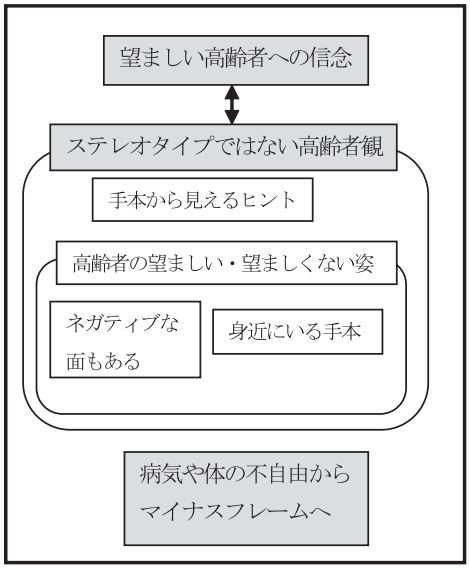

図6．高齢者観ー積極型（略図）

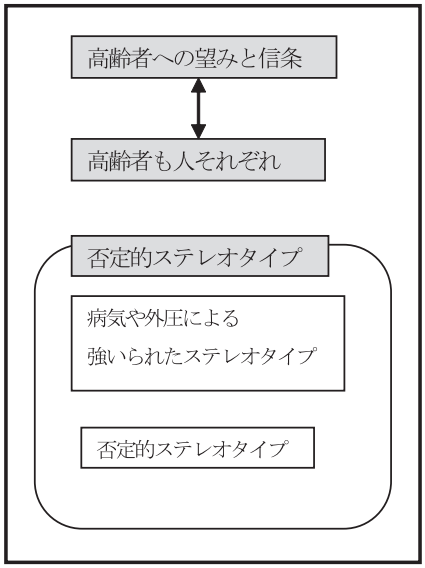

図7．高齢者観ー消極型（略図）

（図7参照）.

消極型の高齢者観は，高齢者も人それぞれとする考えや，高齢者への望みもあるが，否定的ステレオタイプや病気や規範などによる否定的なイメージがあり，やや否定的方向に偏っている.

3）自己老後像と関連要因との関係

積極型の場合，自己認知と自己老後像が相互に関係しており，特に肯定的な現在の自分の状況と積極的な自己老後像が相互に影響しあっていた．また肯定的な高齢者観は積極的な自己老後像と関連していた（図8参照）.

消極型の場合，自己認知と自己老後像は相互に関係する点は積極型の場合と同じである．しかし，高齢者観については，消極型の場合だけが，自己認知と関連していた．すなわち，現状での自分が老化したという自己認知に否定的な高齢者観が加わり，より消極的な自己老後像と結びついているようであった（図8参照）.

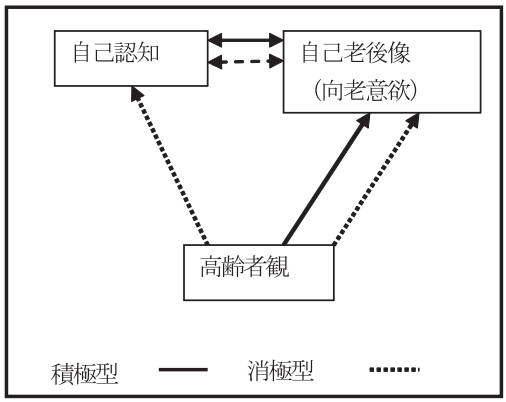

図8．自己老後像と関連要因との関係（略図）

4．考察

1）自己老後像ー 積極型と消極型の比較

積極型の自己老後像は，【今後の人生への信念と意欲】といった表札で統合されており，目標に向かっていく姿が明白である．消極型の自己老後像は，目標を見出したいというこれからへの思いはあるものの，描かれている自己老後像は，今よりも消極的になっていく自己老後像と揺れ動く自己老後像によって構成されている．これらから，積極型の自己老後像の対極は，必ずしも全てに否定的な自己老後像ではなく，むしろ揺れ動く，曖昧な老後像であることが示された.

2）自己老後像と関連要因

（1）自己認知

積極型の自己認知は，現在の日々の生活に対して，肯定的である事や肯定的であろうと積極的に努力している事が示されていた．消極型は，自己認知が肯定的ではなく，思いと行動との葛藤や，停滞感，放棄というように，自身を肯定出来ず，積極型に比べるとより否定的であった．積極型・消極型ともに，自己認知と自己老後像が相互に関係し合っている事が示されてい

る．特に，肯定的な自己認知は積極的な自己老後像へ，否定的な自己認知は消極的になっていく自己老後像と揺れ動く自己老後像に結びついていた．

これにより，積極型には，将来に望む生き方が，現在の生き方の延長線上にあるとした中原・藤田[20]の理論があてはまる事が示された．さらに，それは，Atchley[21]の継続性理論の主張を裏づける可能性を持つものである．

消極型は，老いを直視できず否定的に捉え，それが消極的または揺れ動く自己老後像へと繋がっていた．これは，若さと老いを直視する事から道を見出し，危機が好転するとしたLevinson[22]の指摘とは逆説的であるが，その指摘と共鳴するものである．

(2) 高齢者観

積極型と消極型の高齢者観を比較すると，積極型の高齢者観は概ね肯定的で，消極型の高齢者観は積極型に比べわずかに否定的でステレオタイプ的であった．

特に，否定的な高齢者観は自己認知をより否定的にし，それによって自己老後像をさらに消極的にする事が明らかとなった．

自己老後像との関係性としては，積極型と消極型で異なった影響が見出された．緒言で高齢者観と自己老後像の関連について2つの矛盾した説があるとしたが，積極型においては，Heckhousen & Kruger[23]のいう一般的な高齢者よりも自己に対して，より肯定的な予測をするとした説が支持された．一方，消極型においては，Butler[24]の否定的規定を受け入れ，その事がさらなる否定的なステレオタイプを強化するといった説が支持されるという結果を得た．

3）まとめ

本研究での知見は，第1に積極型の自己老後像は，目標に向かっていく姿が明白であり，消極型の自己老後像は，目標を見出したいというこれからへの思いはあるものの，描かれている自己老後像は，今よりも消極的になっていく自己老後像と揺れ動く自己老後像によって構成されていた事である．第2として，肯定的な自己認知は積極的な自己老後像へ，否定的な自己認知は消極的か，揺れ動く自己老後像に結びついていた事である． 第3として，自己老後像と高齢者観との関係において，肯定的な高齢者観は積極的な自己老後像に影響を与え，否定的な高齢者観は自己認知をより否定的にし，それによって自己老後像をさらに消極的にする事が明らかにされた事である．

以上の知見から，積極型の場合のSuccessful Agingとは，現在の活動の継続である事が示唆される．消極型の場合，これからへの思いと消極的になっていく自己老後像・揺れ動く自己老後像との間には葛藤が推察され，その葛藤にいかに対処していくかが課題である．

また，中年期にある人の高齢期への心構えづくりに寄与し，Successful Agingに貢献するためには，自己認知を肯定的に捉えられる様な支援が，積極型・消極型ともに効果的である可能性が明らかとなった．さらに，消極型においては，否定的な高齢者観について，ステレオタイプにとらわれないようにする介入などが有効である事が示唆された．総じて，否定的な高齢者観が自己認知をさらに否定的にしていた事などから，老化に伴う心と体の変化を正しく認識す

るといった啓発的な老年学の取り組みが望まれる．

4）本研究の限界と課題

本論文の第1の限界点として，典型的な2つのタイプの自己老後像のみに着目し，他の13名を対象外とした事があげられる．第2の限界点として，本論文では自己老後像の関連要因の1つに，向老意欲という新しい概念を提唱したが，その内容についてより解釈を深める必要がある．他のパターンについては分析を進めており，将来的には全てのパターンから中年期の自己老後像を統合したいと考えている．第3の限界点として，本論文の知見は，わずか8名の対象者からのものである事があげられる．よって，質的研究によって知り得た知見が一般化出来るのかどうかを明らかにするためにも，標本数を増やした量的調査による検証が必要である．

謝辞

本研究に，ご協力いただきました対象者の皆さまに心から御礼申し上げます．また，研究・論文をまとめるにあたりご指導賜りました，桜美林大学大学院 直井道子教授に深謝いたします．研究を進める際，桜美林大学 加齢・発達研究所の研究助成をいただきました．ここに改めて感謝申し上げます．

文献

1）厚生労働省懇談会報告書：「人生85年時代」へ人生設計のビジョン示す．労働法令通信，2147：2−7（2008）．
2）林芳代：40代からライフデザインを考える．LifeDesign REPORT，3−4：38（2007）．
3）鈴木征男：中高年における目的志向性の重要性；目的志向性と対人ネットワークの関連性．LifeDesign REPORT，1−2：16−23（2006）．
4）古谷野亘，井上勝也，岡本多喜子ほか：都市壮年における老後の生活像と準備行動（1）；老後の生活像．老年社会科学，7：97−108（1985）．
5）児玉好信，古谷野亘，岡村清子ほか：都市壮年における望ましい老後の生活像．老年社会科学，17（1）：66−73（1995）．
6）中原純，藤田綾子：向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係．老年社会科学，29（1）：30−36（2007）．
7）小田利勝：高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル．徳島大学社会科学研究，5：159−180（1992）．
8）James E. Birren, K. Warner Schaie：エイジング心理学ハンドブック．第1版，270，北大路書房，京都（2008）．
9）G. L. Maddox et al.：エイジング大事典；新装版．第2版，47−48，早稲田大学出版部，東京（1999）．
10）前掲論文7）
11）前掲論文6）
12）岡本祐子：アイデンティティ生涯発達論の展開．第1版，5−15，ミネルヴァ書房，京都（2007）．
13）Levinson. D. J.：ライフサイクルの心理学．第1版，9−210，講談社，東京（1992）．

14）Margie E. Lachman : Handbook of Midlife Development. 493−498, John Wiley & Sons. Inc, New York（2001）.
15）広辞苑．第6版，岩波書店，東京（2008）．（電子辞書版）
16）前掲論文7）
17）木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践；質的研究の誘い．10版，7−11，弘文堂，東京（2011）．
18）川喜多二郎：発想法；創造性開発のために．72版，65−114，中央公論社，東京（1998）．
19）川喜多二郎：KJ法入門コーステキスト．非売品，20，KJ法本部・川喜多研究所，東京（1997）．
20）前掲論文6）
21）柴田博，長田久雄，杉澤秀博ほか（編）：老年学要論；老いを理解する．初版，47−48，建帛社，東京（2007）．
22）前掲著13）
23）前掲著8）
24）前掲著9）
25）川喜多二郎：発想法．第2版，60−64，中央公論社，東京（1998）．

A Qualitative Study of How the Middle-aged View Their Own Old Age and Relevant Factors: A Comparison of Positive and Negative Types

Hiroko Matsunaga
（Graduate School of Gerontology, J. F. Oberlin University）
Michiko Naoi
（Graduate School of Gerontology, J. F. Oberlin University）

Keywords: Middle- aged, Age stereotypes, Attitudes toward old age, Self-acknowledgment

The purpose of this study was to define the attitudes toward impending old age and other relevant factors amongst the two typical types of middle-aged subjects: those with a positive view of old age, and those with a vague or negative view of old age. Data for the analysis were gathered from semi-structured interviews of 21 people aged 44 to 56 living in the suburbs of Tokyo. From this group, eight respondents were chosen for further analysis: four respondents with typical positive views, and four respondents with typical negative views. Results were analyzed using the KJ method of Affinity Diagrams and narration, devised by the Japanese cultural anthropologist Jiro Kawakita（1967）[25]. It was revealed that positive type respondents had happy images of life in old age and were highly motivated toward the future. Whereas, negative type respondents had negative images of their old age and view their futures with uncertainty. It was further found amongst both types of respondents that images they perceived of their own old age were related to self-acknowledgment of their present lives and to stereotypes of old age. The findings demonstrated the importance of assisting the middle-aged in creating a hopeful attitude toward old age.